

「雑」という文字に思いを巡らせて

研究・連携支援センター長 高瀬 尚文

師走になると、「今年の漢字」なるものが発表される。では、「2017年の漢字」に願をかけるとしたら、どのような字が思い浮かぶであろうか。東京新聞のコラム『筆洗』（2017年1月1日）によると、

（前略）お正月にふさわしい漢字といえば、「春」や「福」も浮かぶが、やはり「初」の字に落ち着くか。（中略）気になるのは雑煮の「雑」の字である。験にこだわる日本人が、正月を象徴するハレの料理になにゆえ粗雑、乱雑の「雑」の字の入る名を用いるのか。「雑」とはいろいろなものが入り混じった状態であり「いいかげん」の意味がある。無論、いろいろな食材を入れる調理法に由来するのだろうが、どうも、その字が寿ぎの新年に似合わぬ気もする。その「雑」の字を愛した放浪の俳人がいる。種田山頭火。「雑草、雑木、雑魚、雑兵、等、等、一私は雑という字のつく物事に、限りない親しみと喜びを感じる」。「雑」をたたえている。うなずく方もいるだろう。「雑」の字が付けば、区分や区別の冷たさは消える。みんなおいでよ。優しさや柔軟さをその字は確かに秘めているだろう。新年から対立や分断の時代のなんのとは恐縮だが、時代の対立を少しでもやわらげるヒントが椀の中で調和のとれた雑煮の「雑」の中に隠れていまいか。寛容さのその字が二〇一七年の元旦にふさわしい縁起のよき字に思えてくる。

研究・連携支援センターは、地域社会との連携方針として掲げる「地域と共に生きる大学」を担う組織として、本学教員の研究支援を担う総合研究所と、連携事業を担うリエゾ

ンセンターが統合し、平成24年に発足いたしました。平成28年度 自己点検評価書を元にリエゾン業務を振り返りますと、高大・中大連携事業が19校・58件、講演会開催が15件、職業人を対象とした研修会・研究会の開催や講師派遣が30件、各種団体の地域イベントへの参加協力が11件となっております。みなさまのご支援・ご協力にこの場をお借りして御礼申し上げます。

また、連携協定を振り返りますと、3者以上のものが増えております。例えば、京都府南丹広域振興局及び京都府農林水産技術センターとの3者連携、亀岡商工会議所及び亀岡市との3者連携、京都市右京区と（医）太秦病院、（学）大和学園との4者連携、おおい町と農業生産法人丹波村株式会社との4者連携、亀岡市と京都大学、福井県立大学、（公財）亀岡市都市緑花協会との5者連携であります。こうした流れは、地域が取り組む課題が複雑なものとなり、より高次の協働が必要になっていることの表れを感じさせます。また、予定されている（株）エムアンドエムサービスと特産物を考える会との3者連携、（株）ピーエスシーと特産物を考える会の3者連携では、本学がコーディネーター役を担う、連携事業の新しい姿を見ることができます。

本学が掲げる「四虹京学」による「地域と共に生きる大学」という「雑煮の椀」をつくりあげられるよう尽力して参りたいと思っております。改めて、連携事業へのご理解・ご協力をよろしくお願い申し上げます。